

「回復」し続ける自己物語の維持

——ダルクメンバー／スタッフの「回復」における困難とその克服(2)——

東京学芸大学 伊藤 秀樹

1 目的

薬物依存のリハビリテーション施設であるダルク (DARC) は、スタッフの大多数が過去にダルクプログラムを経験した薬物依存の当事者であり、セルフヘルプ・グループであることを特徴の1つとする。そうしたなかで近年では、スタッフが依存物質の再使用に至ってしまうケースなど、スタッフの「回復」における困難も指摘されるようになってきた (市川 2010 など)。

そこで本報告では、あるスタッフが薬物の再使用へとつながりうる困難に直面した際に、それをふみとどまるために紡いだ自己物語と、そうした自己物語の構築が可能になった背景について明らかにしていく。自己物語を語るセルフヘルプ・グループの参加者たちは、自らが語った自己物語をもって生きることになる (伊藤 2009)。そのため本報告の知見からは、薬物の再使用をふみとどまることを可能にするような自己物語と、その営みを支えていくための条件について考察することができる。

2 対象と方法

ダルク研究会では首都圏にある X ダルクと Y ダルクにおいて、2011 年 4 月から現在までインタビュー調査と参与観察を継続的に実施してきた。本報告で分析を行うのは、現在 X ダルクのスタッフとして働く E さん (男性/40 代/依存物質: アルコール・咳止め薬) のインタビューでの語りである。

E さんと報告者は、2011 年 5 月から 2016 年 4 月にわたり、計 15 回のインタビューを実施してきた。本報告で分析の中心となるのは、ギャンブルへの依存問題が生じ始めた 2014 年 6 月以降のインタビューでの語りである。E さんにはかつて、ギャンブルへの依存の問題によって薬物の再使用 (再飲酒) に至った経験があった。しかし今回は、約 2 年にわたりギャンブルへの依存の問題に直面しながらも、薬物を再使用することなく現在に至っている。

3 分析結果と考察

E さんのインタビューでの語りからは、ギャンブルへの依存とアルコールの再飲酒との関係を断ち切ろうとする、特徴的な自己物語が語られた。それは、ギャンブルに依存している現状を、再飲酒の危機ではなく、さらなる「回復」へのチャンスだと読み替える自己物語である。

E さんは薬物依存からの「回復」を、ただ薬物使用をやめ続けることにとどまらず、成長し続けることだと捉えている。そうしたなかで E さんは、スタッフを務める中で自らが成長している様子が感じ取れる出来事がある、という自己物語を語っている。E さんのこうした自己物語は、『「回復」し続ける自己物語』と名づけるならば、ギャンブルの問題を抱えた現状を「回復」のチャンスだと読み替える上記の自己物語も、「回復」し続ける自己物語の 1 つのパターンだといえる。

E さんの語りからは、薬物の再使用の危機さえも「回復」の契機として読み替え、「回復」し続ける自己物語を維持する営みが、再使用をふみとどまる要因の 1 つになりうるということが示唆される。そのためには、スタッフであっても「回復」を目指す 1 人の当事者として自らが抱える問題について話せる場があり、周囲がその問題に対して寛容であるという条件が必要だと考えられる。

文献

●市川岳仁, 2010, 「回復と支援の狭間で揺れる当事者——転換期の当事者カウンセラー」『龍谷大学矯正・保護研究センター研究年報』7: 31-42. / ●伊藤智樹, 2009, 『セルフヘルプ・グループの自己物語論——アルコールリズムと死別体験を例に』ハーベスト社。